

清水養護を流れる風

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-05-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 北野, 範子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/5610

清水養護を流れる風

北野 範子

序

福井市島寺町（旧丹生郡清水町）に県立学校で一番小規模の福井県立清水養護学校（以下清水養護と記す）がある。私は、この学校に昭和54年度から12年間、平成15年度に1年間在職した。学びの多かった清水養護でのことを語るにあたり、二部構成とした。

第I部には、昭和58年度から3年間、文部省の実験学校として指定された折執筆した実践事例と、今回思うところがあって書き改めたものとの2編（第I・II章）を載せた。

第II部では、実験学校として指定された期間の同僚との協働を中心に述べる。

第I部 実践事例を綴る

書き改めなくなった理由

ここで、実践事例を書き改めなくなった理由をまず述べておきたい。

実験学校（詳細は第II部第II章に記載）として指定された2年目の昭和59年度に、私は中学部1年生男子4名の学級の副担任となった。研究主任としての仕事はあったが、私も事例研究をし、ともに学び合いたいと思っていた。

当時、実践事例をまとめる段階で対象児に対し、どのような方法で、どういう経過をたどり、結果はどうであったか、ということ筋道を立てて書かなければという思いが強かった。また、意思の伝達方法が子供の無理のないものかと考えたはずだが、当時のものはそこどころが書き足らず、20数年たった今、改めて読み直してみると少し息苦しく感じる。でも、その時はそれで私の力一杯の表現だったし、それはそれで日々の実践の楽しさと苦悩の中から導き出して示した一つの事実だった。

昭和54年度養護学校が義務化し、まだその教育が黎明期にあって、当時の文部省が実験学校を指定して重度の障害のある子への指導内容・指導方法を研究させ、その研究成果を発表する使命を負わせたことは必要なことであつたろう。その役割を課せられたことで確かに私たちは、実に多くのことを学び、私自身もそれ以降どれだけ役立てたか計り知れない。文部省の初等中等教育局教科調査官大南英明氏からは、研究発表後最大級の賛辞があつたことを校長を通じて翌朝知らされ、また県内でも関係者からの大きな反響も得て、当時その役割は十分果たせた、と今でも思っている。

今回、このような機会を得て書き残された記録を読んでいくと、ほとんど自分自身のことについての記録は残されていないが、事例に載せなかった事柄の中に、興味深く感じる記述が多々あり、ともちゃん（仮名・兄）の仕草や息づかいが鮮明に思い起こされた。

少しずつコミュニケーションが取れるにつれ、ともちゃんにどのようなことが生じていったのか、可愛い仕草も含めてそこを綴り直してみたいと思うようになったのである。

第Ⅰ章 写真に興味のあるともちゃんとの「気持ちの伝え合い」

実験学校時の実践事例

第1節 子供をとらえる

ともちゃんという子

ともちゃんは、中学部1年生の男子。穏やかな性格できゃしゃな体つき。音声言語はないが、「いただきます」などは身振りで応え、具体物や身振りを重ねての簡単な言葉掛けであれば、日常生活の中でできる事柄はいろいろある。しかし、畳の上をズックで上がってしまったとき、教師が「ズック」「ズ」「うーん」などと語ると、いずれの場合でもその言葉をきっかけにしてズックを脱ぐ。毎日繰り返し行っている事柄については、前後の関係や周囲の状況から判断し、その場に合わせた行動を取っているらしいことが分かる。

私とは初対面であったことも関係してか、自分から係わりを求めてくる場面は限定的であったが、クラスの友達や教師の行動に興味深げに見つめている姿から、ともちゃんとのコミュニケーションをとる手立ては講じられると感じた。

ともちゃんに願った姿

ともちゃんは、水が飲みたいときなどは教師の手を引いて、目的の場所まで連れていこうと行動で示してくる。しかしその多くは自成信号系のものであり、ともちゃんの要求が何であるかを知るのは教師側の読み取り方いかんにかかっている。ともちゃんからの思いや要求を受け止めていくためにも、人に分かる伝達手段があって、それを日々の生活の中で使えればその時々ではあっても意思の伝え合いができる。そういう経過の中で交信意欲も高まり、ともちゃんの生活は便利で楽しく充実したものになるのではないかと考えた。

ともちゃんの学校生活を整える

ともちゃんにとって音声言語に代わる伝達手段として、どのような内容がよいのだろう。イメージしやすいもので関心を示しそうなもの、また、学校生活の中でよく使われる事柄で体得すると便利なものと考えるうちに、「日課を表現できるようになる」というのはどうかと考えた。学校の週時程表は子供たちの特性を考慮して毎日帯状に時間を取り、繰り返し行うようになっている。その中から「乾布摩擦」、「着替え」、「ラジオ体操」、「給食」の四つと「排泄」であれば、1日の中でその都度交信し合う機会ができる。そして、偶発的なことで意思を伝えてきたものも取り上げながら、ともちゃんの伝え合いの気持ちを育てていきたいと考えた。この内容であれば、ペアを組んでいる学級担任の広嶋教諭の協力が得やすく、常時学級にいれない私にとっても可能と思えたからである。ともちゃんの様子を見ながら概ね以下のような段階を踏むことにするが、まずは、生活の見通しが立てやすいように1日の生活の流れを意識づけることで、ともちゃんが理解しやすくする。

第2節 ともちゃんへの試み

写真カードを手がかりに

1 写真カード作り

ともちゃんが、写真を興味深そうに眺めている姿は目にしていたので、伝え合いの手段の一つとして写真カード（以下カードと記す）を作ることにした。ともちゃんの活動場面を撮って彼自身の姿を切り抜いて白厚紙に貼り、ぬれてもよいように粘着性のあるビニールを貼り付けた葉書程度のカード4枚（「乾布摩擦」「着替え」「ラジオ体操」「給食」場面）とトイレ（便器）のカードを用意した。カードを置く場所は、教師用机の引き出しの中とした。ともちゃんが、必要に応じて取り出すことを期待したからである。

2 指導方法

<第一段階>

ともちゃんが落ち着いて聞くための心の準備ができるよう向かい合って椅子に座り、日課に添ってその学習の前後にカードを提示し、意味する内容を伝える。たとえば給食の前には、右手をげんこつにして私の口元に持っていく、「チュタチュタ、給食、次は給食ね」と、音声言語と身振りを重ねて行う。次には、ともちゃんの口元に私のげんこつを持っていくと、そっと口を近づけてくる様子が窺えたのでそこを大事にして、同じ言葉を言う。静かな場を作り、時にリズムカルに繰り返す、集中し期待する気持ちの高まりを待つて行う。カードの意を理解したら、複数のカードから適切に選べるかを見ることにする。

<第二段階>

写真カードが理解できた段階で、身振りサインを習得できるようにする。身振りサインは、ともちゃんがやりやすいような動作にし、添える言葉は第一段階と同様にした。

給食 「チュタチュタ、給食、次は給食ね」という音も重ね、口に手を当てる動作。

着替え 洋服をつまむ動作。 「きがえよ、きがえ。おズボン、ぎゅ」

乾布摩擦 彼のポーズを利用しあごや首もとをこする動作。「ごし、ごし。かんぶまさつ」

ラジオ体操 両手を上げ左右に回して下ろす動作。 「ラジオ たーいそう」 排泄 下腹部を叩く動作。 「おしっこ、おしっこ、トントン」

<第三段階>

ともちゃんが次の学習のため教室を出て行こうとするときなど、「どこへ行くの」「次は？」と尋ね、身振りでも応えられるかどうか、最終的にはともちゃんが生活の中で必要に応じ、身振りサイン（カードも可）ができるかどうかを見ていくことにする。

ともちゃん、学校生活を楽しむ

1 写真カードの意味する内容を知る

学習前の5分～15分程度ワンポイントレッスンをする。カードの意味するものは1学期でほぼ理解。しかし、カードの中から次の日課を選択するのは簡単ではなかった。

4月 ともちゃんにカードを見せると、あれこれ持ち替えて眺め予想以上の関心を示した。

5月 おもむろにカードを引き出しから取り出し目の前に並べ始めるとともちゃんの表情 が変わり、給食カードが出てくると殊の外嬉しそう。2枚以上のカードを並べる場合、 離して置くと、目の向け方、見方でともちゃんがどのカードをよく見ているかが分かる。 自分で引き出しからカードを取り出し、給食カードを見つけ出して嬉しそうにする。

ランニング後、給食カードを取り出しニヤッと笑っている。私が、「次は給食、チュタチュタ」、級友が「チュタチュタ」とすると、声をたてて笑う。

6月 その9日後、給食カードを取り出して口元に当て、盛んに「キィーキィー」、そのうち、「チュタチュタ」、舌を巻くような打ち方で音を出す。ビデオで確かめると、それが2場面出てくる。また、手洗い場で手をこする動作もちらりと見て取れた。

6月末 朝から給食カードを取り出して、「チュタチュタ」と音声を出し楽しんでいる。カードがよれよれに。この頃になると着替えカードの意も分かり、写真を選択しじっと 見て行動に移すところが印象的。

7月上旬 登校時、乾布摩擦と着替えのカードを並べ「次は何するの」と尋ねると、乾布摩擦カードを取る。「そう乾布摩擦ね。行っておいで」と言うとロッカーから乾布摩擦用のタオルを取り出し、走って教室を出て行く。

朝の会もすんだ時、再び両方を並べ「今度はともちゃん何するの」と尋ねると、乾布摩擦のカードを取り口に当てた。「チーン（違うよの意）」と言うと、ともちゃんは「これでしょ」とばかりに表情を曇らせ、着替えのサインをしてきた。乾布摩擦のカードを取った時、「そう、乾布摩擦は終わったね。上手だったよ」と言えば

よかったと反省。

また、グループ学習で行った「ぞうさん」の動作が気に入ったのか、その後のランニングの時間に走りながらやたらと腕を振って私の方を見る。私も「ぞ～うさん、ぞ～うさん、お鼻が長いのね」と歌いながら腕を振って応え、「ぞうさんは、お・し・ま・い」と言うと、待ってましたとばかりに手をパン（後に「おしまい」の意として使う）と叩き、声を立てて笑う。ぞうさんの動作を「グループ学習」を表すものとして採用する。

カードが2枚であればほぼ確実に選択できる。この頃「給食カード」と「乾布摩擦カード」がお気に入り、4枚でも正しく取れたので期待して6枚並べたらかき回して怒る。

2 広嶋教諭との話し合い

写真カードにするには、やはり本人が写っているものの方がよいということで、トランポリン、朝の会、掃除場面やボール遊び、紙遊び等々その都度撮ってカードにし、日課や学習の振り返りに使っていくことに。黒板にはその日の日課順にカードを貼ることにした。

この学習を始めた頃はずもちゃんに日課（学習の予定）の話がうまく伝わっていかない感じがあったが、1学期末にもなるとそれぞれの写真の意味することがよく分かってきて、この頃には、広嶋教諭も具体物を使ったりカードに身振りサインも重ねて話すので、ともちゃんは嬉しそう。一度に学習内容を連ねて話すことができる状態になっていた。

3 身振りサインの習得

6月に覚えたラジオ体操以外は、9月から9月半ばにカードを前に身振りの指導を始める。手や腕に力が入らない感じの動きをするので、広嶋教諭も、「首の所に手をやるが、かゆかったのか、身振りなのか分からなかった」と話す。しかし、乾布摩擦は1か月足らずで覚える。給食のサインと混同する時期もあるが、2学期後半になるとだんだんとはっきりしたものになる。そして、音声を伴うことが多くなる。

9月 グループ学習時、象の映像とともにぞうさんの曲が流れるよう編集したビデオを見せたところ、大変なお気に入りとなり、グループ学習後教室に戻るとテレビの前に立ちビデオをつけろと言う。「もう、おしまい」と言っても納得しない。着替えカードを示し誘うが、嫌がってカードを片付けてしまう。でも映像が出ないと分かると諦めた。

10月 ともちゃんが給食の身振りをするつもりで、あごのあたりをこすってから口の付近で手を止め、「これでいいんだっけ」とでも言うようにこちらをじーっと見ている。「そう、これね」と私が口に手を当てて応え、ともちゃんは手を口にそっと持っていく。でも次の瞬間には、乾布摩擦の身振りサインであるあごをこすっている。

11月 登校後、乾布摩擦のタオルを持ち出し教室を出ようとする。「どこ行くの」と尋ねると、ともちゃんはあごをこすって見せた。「行っておいで」。このやりとりは二人の会話になっている。乾布摩擦の時間、タオルで腕をこすっているのを初めて見た。おなかもこすっている。ともちゃん、乾布摩擦に気持ちが入っている！

学習発表会も近づいたある日、登校後すぐ着替えをしその後、私の顔を見ながら、乾布摩擦の身振りサインをしてきた。今日は乾布摩擦をせず文化祭のリハーサルがあることをどう知らせようか一瞬迷うが、「大きな靴、トントントンするよ（小人とくつや）」と身振りと言ったと、表情が和らぐ。体育館への移動時、乾布摩擦をする空っぽの音楽室を見せ「今日乾布摩擦はしな～い」と伝える。

帰りの着替え時、着替えカードと帰りの会のカードを二つ持って私の所に来る。着替えカードでは「おズボンぎゅっ!」、帰りの会カードでは「さよ～うなら～」が言ってほしいのだ。代わる代わるカードを選択し、私に言わせてそのカードを口元に当て「キーキー」と喜んでいる。着替えカードを出したときに「さよ～うなら～」と言おうものなら、「違う、これだよ」とばかり表情を変えて私の指を写真の所に持っていく、「おズボ

ンぎゅっ！」を期待した表情で待っている。意にかなうと笑い体を弾ませる。

12月 給食の前、教師に「次は給食だよ」とか「ねえ、給食に行こう」とばかりにともちゃんから給食の身振りをしてくることが多くなった。ともちゃんが給食カードを見せ てきた時、「これと一緒に」と言って黒板に日課としても貼ってある給食カードに並べて 見せると、意味ありげな目つきで眺め、【o:】と言って給食サインをしてきた。

4 身振りサインを使う

身振りサインを生活の中で、かなり適切に使えるようになっていく。

帰省時 保護者に冬休み中の家での状況を知らせてもらえるよう依頼しておいた。母親 が食事を作っていると、ともちゃんが近づいてくる。「(今から)何するの」と聞くと 食事の身振りを。また、以前は2時間位をめぐりにトイレに促していたが、今回は、みな サインで教えてくれたという。寝る頃になると、着替えサインをしたりもする。家族との係わりに関しては、妹に対して威厳を示すなどともちゃんなりの家族との力関係を作 っていることや、優しさ・真剣さの表れたいくつかの話も聞けて、興味深かった。

1月上旬 乾布摩擦と給食の身振りサインを混同している。休み明けだからか・・・。

中旬 広嶋教諭に、着替え後「着替え」と「ラジオ体操」の身振りサイン二つを連ねて出 してきた。教諭は「着替えがすんだからラジオ体操に行こうって？」と返したという。

2月 教室とは別の場所で他の教師から声かけをしてもらい、様々な人とも交信できるよ う試みた。3月には他の教室に走っていき、そこで身振りをしてきたとの情報を得る。

第3節 ともちゃんの頑張り

ともちゃんの「身振りサイン」

1 覚えた「身振りサイン」

12月頃までには、「給食」「乾布摩擦」「着替え」「ラジオ体操」「排泄」の身振りサインを覚えたが、「給食」と「乾布摩擦」とを混同する時期があった。

給食 大好きな給食なので早く覚えるのではとの期待もあったが、予想以上に時間がかか る。9月から始め、11月にはできるようになる。「チュタチュタ」という音声は6月 から出ていたので、それを「給食サイン」として使っていく方法もあったと思う。

着替え 洋服をつまむ動作にしていたが、げんこつで胸元を軽く叩く動作をしたのでそれ も取り入れる。これは1学期の段階から時折していたが、9月から始め11月にはしっ かりと。胸元とズボンをスーッとなでる仕草で伝えてくることもある。

乾布摩擦 ともちゃんが時折りする動作をサインにしたからか給食より早く覚える。9月 半ばに始め、1か月後にはできるようになる。

ラジオ体操 6月の早い段階から使い始め、7月にはできるようになる。

排泄 カードより下腹部を叩く身振りサインを優先。12月にはしっ かりと。顔つきが変わるので表情からも分かるが、ズボンを少し下げる、お尻に手を回すサインもする。

2 さらに新たなことも・・・

当初始めた五つの身振り信号の習得については、「ラジオ体操」を1か月足らずで最初に覚えた。ラジオ体操で用いる大きく手を回す動作だったので容易だったのだろう。その他は私たちが読み取れるだけの身振りとなるまでには1か月～3か月かかったが、友達の身振りをまねた「腕を振るランニング」や、教師とのやりとりをしている

うちに作り出された「手首を左右に振るさよならの意の帰りの会」、「腕を左右に振るぞうさんのグループ学習」、「手をこすり合わせた手洗い」、「パチンとたたくおしまい」の意の身振り信号も形作っていった。結果としてともちゃんは、当初試みた五つに加えさらに日課に関して三つ、学校生活の中で使うものとして少なくとも二つの身振りを作り出した。そして、いったん覚えてしまうと生活の中で確実にはっきりと意味をなすようになっていった。

12月初めには、教師への呼びかけや日課を伝える意からだと思うが、【uo:】【e:】【ao:】【o:】などと音声に伴ってきている。給食の身振りサインを出すときに最もよく出ている。

三学期、どんな身振りをいつ頃出すかということを見ていくと、給食は1日に1回だけだから身振りサインも1回だけですむ、というものではない。日課をほぼ理解していてその時間帯が近づくと、それに見合う身振りを時には音声を伴わせて多くしてくる。また、それ以外の時間にも時々してくるが、ふっと思いついて出たときや教師とのやり取りを楽しむためのもの、次はあれだと確かめている場面など、いろいろな思いで身振りをしているものと思われる。カードを仲立ちにして朝の会や遊びの内容などの理解も深めていった。

予測しなかったこととして、もう一つ。広嶋教諭に向かって、着替え後「着替え」と「ラジオ体操」の身振りサイン二つを連ねて出してきたことがある。

3 生活を充実させていく

「給食」と「乾布摩擦」両者の身振りを混同させてしまい、ともちゃんにとって無理なことを求めているのではないかと、実はここが一番苦しく感じていた時期であった。が、変更するとまた混乱させてしまうのではないかと不安もあり、様子を見ることにした。

ともちゃんにとってイメージを持つにはカードはとても効果的ならしく、身振り習得中の10月頃でもカードを取り出して見て、そして、身振りをしてくるという状況があった。

身振りサインをするとき、私の目を見つめて「これかな？」とでも確かめるような真剣なまなざしを向けてきて、ともちゃんも確実に伝えたいとの思いを持って頑張ってくれていたことを改めて感じる。

獲得できれば身振りサインはいつでもどこでもできる手軽さがある。排泄の身振りサインがいくつもの形をとったように、他のものも時間とともにともちゃんの気持ちが入った伝えやすいものに変えていこう。私たちは、一つのきっかけを作ったに過ぎない。

さて、ともちゃんと出会った頃、友達の行動を見つめている彼の姿をよく目にしていた。気がついてみれば、友達の動きのいろいろなことをまねようとする様子が随所に見られた。

ある日、級友の遊びを見ていたともちゃんは、その後直径1m程のバルーンを一人取り出し同じように腹ばいになって乗ろうとしている。弾む感触がおもしろらしく、嬉しそうに声を立てて乗っては落っこちている。最後には十分やったという表情が見て取れた。

給食の折には、隣の学級の生徒が、「ヒューヒュー」と大きな声で叫ぶと、後ろを振り返り、その子の様子を目を凝らして見つめている。そして、向き直って「ヒュー」、後ろを振り返りまた向き直って「ヒューヒュー」。給食を食べていて、思い出したように「ヒュー」と言っている。

ともちゃんは、教師や級友とのコミュニケーションが深まり学校生活が実に楽しそうであった。昼休み、連絡帳を書いていたところからかともちゃんが走ってきて、私の近くに来て肩に手を掛けのぞき込むようにして笑って私を見ていたという親愛の情も含め、優しくかわいいともちゃんの息づかいを思い出す。年度末の頃には、学習への参加の仕方が積極的になり、雰囲気を感じて黒板の前に出てきて、教師と指さしや身振りサインでやり取りを楽しんだり、席に着いている友達の方に振り返って笑顔を返すなど動きが柔らかい。

何となくさんの豊かなともちゃんの姿を見たことか。味わい深い学びの1年間であった。

第4節 実践を綴ることの意味を問い直す

「日課を伝える」という行為は、ともちゃんにとって単に次の学習のお知らせをしているだけではない。気持ち

を整えその学習に向かう意欲を育む時であったり、その学習を思い描き期待し、楽しかったことを味わったりする時間ではなかったかと思うのである。乾布摩擦で、前に立つリーダーに視線をやり、タオルがどの部分をこすっているか見ている。いつの間にか腕をこすり、おなかもこするような動作をとる。脇腹の時は何となく片腕を上げる。意思がはっきりしているのは背中をこする場面。できないので私にタオルを投げる。背中にタオルを当ててあげると一時「それでよい」、という表情をする。

一般的には体をこすだけの乾布摩擦も、ともちゃんにとっては、試行錯誤しながらもわくわくするおもしろい学習になっていたに違いない。6月の時点で一番早く身振りを覚えた「ラジオ体操」とは、気持ちの入れようがだいぶん違う。

ともちゃんには、「給食」と「乾布摩擦」のカードがお気に入りの時期があった。この実践を読んだ人が、「給食が好き、というのは分かるけど、何で乾布摩擦のカードがおもしろいんだろう」とつぶやいた。その時点では気づけなかったが、今その謎が解けたような気がしている。ともちゃんにとって「乾布摩擦のカード」は、日々魅力的なことが詰まった期待できる学習として、そのイメージが伝わってくるものだったからではないかと。

当時の私は、日々の様子をこうしてメモしながらもその部分を実践として事例の中に反映させなかったのは、たぶん大事と思えるものが異なって見えていたのだろう。その状況の意味するところを深く洞察するだけの力がなかったのだと思う。

こうしてともちゃんの動作や行動を書き綴ってみると、ともちゃんの心の内に触れられたような気がする。どういふ言葉であればその状況や子供の息づかいを伝えられるか、推敲を繰り返すなかでともちゃんとの世界は深まっていく。身振りサインができたのかできなかったのか、という道筋や結果も確かに大事なことだが、身振りサインの習得過程のなかで、ともちゃんが見せてくれる気持ちの育っていく様子こそが実は外してはならない貴重な部分だった、と感じ取っている今の自分に新鮮な驚きがあった。

年月を経て実践を綴り直してみた意味はそこにあったのかもしれない。その奥深さとおもしろさに改めて触れた思いである。実践を綴り直してみたことで、ともちゃんや私にどういふことがもたらされたのか、今回、そこが描きたかったのである。

第Ⅱ部 実験学校での協働

私は、清水養護に13年ぶりに転勤した時、校内を流れる風が「あの時と同じ！」と直感した。校内が温かさに満ちている。子供の話題が絶えない職員室。闊達に意見交換する教員たち。あの頃とちっとも変わっていない。清水養護の魅力的な学校文化は、どこに端を発しているのだろう。「年報」や「清水養護十年史」などを参考に、第Ⅰ章では創設期に触れ、第Ⅱ章では、実験学校として過ごした3年間の同僚との協働を記す。

第Ⅰ章 開放的で若々しい気風が

第1節 清水養護の創設期（昭和52～53年度）

清水養護の設立

養護学校が義務化となる2年前の昭和52年4月、清水養護は、福井県心身障害者コロニー「若越ひかりの村」の児童棟に居住する学齢児を教育する学校として設立された。小・中学部の在籍数49名の県下一小さな県立学校で、2番目の知的障害養護学校となる。

4月1日発令された教員は、校長、教頭、教諭15名（内新採用が7名）、養護教諭の計18名。多くは障害児教育の未経験者だった。

校舎はまだ完成されておらず、6月末までは児童収容施設「あさぐも学園」（福井市森田）の一室を仮校舎にし、そこで児童生徒（以下子供と記す）の教育にあたった。とはいうもののあさぐも学園の指導法を学校側が見よう見まねで習うというのが実情であった。

初代教頭の林一英氏（3代目校長。以下林氏と記す）は、辞令が出て1月から開校準備に取りかかる。障害の重い子供に心洗われるような純粋さを感じ、この子供たちの教育ができなかったら教師として成り立たない、そんな思いを持ち身を投ずる決意をしたという。

教員たちの模索

どういう教育をしたらよいかと、初年度のできるだけ早い時期から、校長以下全員が2～3名ずつのグループを組み、県外視察に出かけた。しかし、障害の程度が重い児童生徒の在籍する学校が他にはなく、余り参考にならないとの思いを抱く。子供の実態から排泄や食事を自立させるための方法こそ探らなければいけないと、そこに思いが集まっていく。障害のいくらか軽い生徒は、実習に行くなど指導方法については、暗中模索であったけれど、具体的な教育活動は始まっていた。2年目、研究活動に関する共通理解の場として全体研究会を立ち上げ、そこで教育目標・教育方針を築き、教育課程編成や指導の検討などを話し合うようになる。2年間は悪戦苦闘の連続。でも皆で学校を作っていこうと気概に溢れ、雰囲気は極めて明るく、若々しい気風が校内に満ちていたと記されている。初代校長が悲願とした「年報」の発刊

初代校長の岩本巖氏は、年報発刊に向けての並々ならぬ思いを「清水養護十年史」に記しているが、校内の同意を得て初年度の昭和53年3月「年報」第1号が発刊することになる。その喜びを巻頭文の中で次のように記している。（一部抜粋）

「年報第1号が発刊されることは、私たちにとって今年度の掉尾を飾る嬉しい出来事であります。（中略）1977年を児童生徒と共に教育の灯をかかげて生きてきた証左として、若干の記録を残すことになったのです。児童生徒を語ることは自らを語ること、自らを語ることは、児童生徒の成長の過程を語ることに他なりません。このことは、私たちの喜びであります。私の喜びであります。この記録は生命のあかしであります。」と。

岩本校長は、養護学校の教育研究会（現 福井県特別支援学校教育研究会）が福井県において将来相当重要な役割を果たし続けるであろうと、その発足に尽力した人でもある。

第2節 進む方向は全体研究会で決める（昭和54～57年度）

研究活動での基本姿勢

昭和54年度、養護学校義務化の年に私は赴任し、ここで12年間の勤務が始まる。年報第3号に、「私たちの教育活動は、毎日のように新しい工夫をこらして行われている。そのための討論もまた執拗に繰り返されている」とあるように、示された学習指導要領は包括的だったので、教育課程編成などの全体研究会になると、熱気を帯び議論は白熱した。岩本校長は静かに見守りながら、時に優しいまなざしで「子ども中心に。分からないことは勉強しながら進めればいいのであって・・・」とぽつり投げかけ、教員の学びを喚起する。温かい雰囲気の中にも自由闊達に意見を言い合える信頼関係が醸成されていて、子供たちのためにどうするとよいのかを常に考え合う職場になっていた。

昭和56年度から2年間に発達段階における具体的な教育内容を選び出し、教育課程のガイドラインを作り上げた。昭和57年度には、各自が事例を通して子供を見つめ直すことにした。「事例の蓄積は、教師が子供とかわかっていくときの基本。対象児のとらえ方、指導法を考えることは、教師自身の力量を高めることになる。共通のテーマを持ち合う者同士が意見を交換し合い、さらに深く考えていこうではないか」と、一人1事例を持ち、月に1～2回グループ別研究会を持って年度末には年報にまとめることにした。こういう姿勢は創設当時からであり、清水養護の研究活動の基本を指し示すものとして意味深い。

そこに深くかかわってきた林氏は、岩本校長のことを穏やかで非常に見識がある方と評するが、林氏もまたしか

りである。林氏は、創設時から教頭として5年間、その後校長としての2年間も含め清水養護の子供を慈しみ、教育に対する熱い思いを抱いている教員たちの牽引役となって学校の礎を築いた一人である。

第Ⅱ章 文部省指定実験学校となった清水養護

第1節 こんな規模の小さな学校が・・・

本校が実験学校に指定される事情（昭和57年度）

「こちらに寄んなさることはないですか」当時、県教育庁指導課課長補佐の岩本日出男氏から3代目校長林一英氏に電話がかかってきた。実験学校が本県にあたるのでその打診であった。その折、依頼する3つの理由が示されたという。

一つ目は、この研究は清水養護に在籍する子供の実態に合っていて他においては無い。

二つ目は、開校されてより、県の指定を一度も受けていない。この機会にやってほしい。

三つ目は、今まで年報を出し実践の積み重ねができており、頼める安心感がある。

校長は引き受けざるを得ない旨を全教職員に伝え、昭和58年度から3か年間実験学校「重度精神薄弱児の指導内容・方法に関する研究」として文部省に指定されることになる。

第2節 指定校としての初年度（昭和58年度）

文部省の実験学校に指定されたことで

初年度の秋、タイミングよく開催された同じ部門の実験学校として指定されていた大阪府立豊中養護学校の研究発表会に校長と8名の教員が参加した。コミュニケーションに関する研究内容で、全国から約700余名もの参加者があり、実験学校始まって以来の大記録で校内は大変な混雑であった。一番の原因は、講師として出席した方々の顔ぶれの豪華さにあった。松原隆三氏（兵庫教育大学教授）、宮崎直男氏（国立特殊教育総合研究所精神薄弱教育研究部長）、坂本龍生氏（神戸大学教育学部教授）、竹田契一氏（大阪教育大学教授）たちがパネルディスカッションをするのだから、当時特殊教育に携わっている者ならば誰でも一目見たいと思うのは当然である。研究会におけるセンスのよさとど肝を抜くやり方に、さすが都会的だと驚かされるばかりであった。しかし、当校の子供の姿が感じ取れず、参加した私たちは清水養護らしい形にしたいとの思いを強くした。

テーマに反映させた新任教員の思い

話は前後するが、この年の春、年配教員の異動に伴い初任者ばかり7名が来た。在籍数は減少し34名になっていた。教諭は15名。小規模校なので子供一人一人がよく見える。また、教員数が少ないことから、納得のいく話し合いもできる。そんな特長を生かして、やるからにはこの学校の子供にとって意味のある研究にしたい。そんな思いはさして語らずとも新任教員を含め皆が心している雰囲気があったが、研究テーマが決まるまではアンケートも重ね会合は熱気を帯びていた。

赴任して2か月足らずの新任教員たちは熱心で、子供を前に今自分が何に戸惑っているのか、また教育への思いを熱心に語り、私は、忘れかけていた初めてこの学校に足を踏み入れたときのことを思い返していた。時間の経過とともに、子供につけたい力として、「コミュニケーション」や「感覚・運動」、「授業の在り方」というキーワードが浮かび上がってきた。そして、具体的にどのようなテーマで実験研究していくかを決めるための教師の願いが確認できる段階になった。

① コミュニケーションの成立が困難な子が多く、指導の基本となるその能力を高めたい。

② 発達の未分化な子に感覚・運動的要素を含んだ課題を与え、能力を助長したい。

③ 活動を引き出すための手立てを工夫し、子供が目を輝かせる授業を探りたい。

7月には、研究方法や研究計画等も確認し、次のようにテーマが決定した。

「コミュニケーション並びに感覚・運動的要素を主にした授業のあり方を求めて」

先生方は、やりたいことをしたらいい

これまでの経緯を含め、私たちの思いを研究運営協議会（実験学校に指導・助言をし、研究結果の検討にあたる会）に諮った。一番の気がかりは、少人数なのにあえて授業を核として「コミュニケーション」と「感覚・運動」の二つの研究グループを作ろうとすること、その人数も極端にアンバランスになりそうなことを伝えた。すると、「先生方は人数のことなど気にせず、やりたいことに取り組むのが一番」とのアドバイスをもらった。

こうして、1年目は、入りたいグループの希望をとり、二つのグループに分かれ、私たちは若くて未熟であったが、先行研究に関する資料の収集や児童生徒の実態把握、研究計画など、研究の具体的な方向性を決めるべく熱心によく語り学んだ。福井大学教育学部教授藤澤清氏から「科学的に調べろ、子ども中心に語れ」とアドバイスを受ける。

コミュニケーションについて皆が学んだ日

年明けた2月、コミュニケーショングループリーダーの企画により、福井大学教育学部助教授松木健一氏によるコミュニケーションについての学習会を全校の教員を対象に行った。そこでは、ことばのない子でも、その子のレベルでの表現の可能性が内在することに目を向けて指導できること。そして、その指導を通して子供自身が自分の行動を調整するという、子供の内面を育てるところにコミュニケーション指導の大切さがあることを学んだ。そういうコミュニケーションのとらえ方があることを、松木先生は東京大学名誉教授梅津八三氏の理論をもとに実に分かりやすく教えてくださった。指導するにあたっての具体例が様々に示され、音声言語以外にも視線、泣き声、しぐさや身振り、絵や写真のカード、実物などが信号となり、コミュニケーション手段となることもよく理解できた。

私は、この時初めて松木先生の話をもったが、講義の一言一言が新鮮で、これから進めていく上で大変示唆に富む学習会となったし、これから始まる学びに心の高まりを感じた。皆の強い意向もあり、コミュニケーショングループの指導者を依頼する。

感覚・運動については

感覚や運動は人間発達の基礎をなすもので、発達が未分化である知的障害児にとって、情報の受容や表現の窓口としての感覚・運動の指導は極めて重要であり、それらをもとにして精神構造は高まっていくことを知った。

第3節 指定校としての2年目（昭和59年度）

一人 1 事例

2年目になると、それぞれのグループが定期的に会合を持ったが、一人1事例ということが課せられていたので皆真剣だった。その日の業務を片付け、実践の振り返りや事例研究のための教材作り、同僚との意見交換をすることなどは、勤務時間も過ぎた夕方から夜にかけて盛んに行われていた。新任教員を始め若い人が多かったからか、帰宅時間も気にせず各自が納得するやり方で夜の静かな時間を明日への準備に当てていた。時には、校長室を借りてうどんをすすりながら意見交換ができる夜の一時は、充実していて楽しかった。

「事例研究をしていくときには、2～3か月ごとにまとめていくと、その作業を通してこれからどう進めばよいかを考えることになる」と松木先生から教わった。報告会では、同僚の意見を聞きさらに松木先生からアドバイスをもらったことは、新たな発見があり、次への意欲につながった。同僚の発表から自分の指導している子の今後の方向性が見えてくることもあり、有意義な時間となり充実感があつた。頼りになる仲間がいて、複数の教師の目で見取っていく実践の確かさを感じ取っていた時期であった。

他校の研究発表会に学ぶ

10月、千葉県立四街道養護学校が肢体不自由部門の実験学校に指定され研究発表会に参加した。よい天気にも恵まれたこともあって、屋外でのダイナミックな活動に子供の笑顔が輝いていた。発表時に使用されたスクリーンを使っただけの映像は、発表内容や子供の日頃の様子を理解する上で大変効果的で、当時の私にはとても斬新なものに見えた。何とかその映像を持ち帰り、我が校もこのような類のものができないものかと考えた。そこで、翌日発表校の学校長に申し出たところ、幸運にもダビングしたテープを分けてもらえることになり、大きなおみやげを持ち帰ることができた。

関係者で視聴した後、視聴覚担当は、「これに負けないくらい立派なものを作りますよ」と言ってくれた言葉が心強かった。

1日に1回しかない日課を選んでも・・・

11月30日の夜だったと思う。コミュニケーショングループの教員二人が研究主任の私に物申す、という雰囲気の中で近づいてきた。「1日1回のサインは効率が悪い。3か月かかるところを1か月で集中的に強化子（ご褒美のお菓子など）を使いながらやるべき。1日に何度も同じサインを使う場面を設定できるものの方がよい。ちょうだいなどは帰寮しても必要。乾布摩擦など覚えても寮（子供が居住する児童棟）で使えるわけじゃなし」と。

今行っている実践がどのような成果をもたらすのか、この時点ではまだ何も分からない。訓練して効果ははっきりと表れやすいものにしたいという気持ちは、痛いほどよく分かる。まだ、はっきりとした成果が見えず苦しかったのだ。この話をしていく時気づいた。これは、目の前にいる二人だけの思いではない。なぜなら、周囲の教員たちが静まりかえり、その話の行方を窺っていると感じ取れたからである。私が目指すべき完成した姿を示せば同僚たちももう少し見通しが持てて気持ちも楽にできたかもしれないが、私も未熟だったし、結果としてどのようにまとまりがついていくのか、この時点で予想などできるはずがなかった。ただはっきりしていることは、それぞれの教員が、対象の子供に合わせ日々実践を重ね定期的にまとめては、事例研究会を持ち経過を追ってきたという事実がある。個人的に方向転換をすることがあったとしても、この時点で皆が方向修正をすることなど考えられなかった。そしてもう一つ、私も事例研究をしていたので、その時実感として持っていることを述べることはできた。

「1日に1回きりの身振りだと言われれば、それまでのこと。そして、1日1回しかないものは、時間がかかるというのは、確かかもしれない。ただ、その身振りサインを覚えていくなかで、教師との係わりがあり、ともちゃんの場合、今は友達の動きを見て真似るようになっていく。一つのことであっても膨らみ広がっていくので、方向性は間違っていないと思う」と。これが二人の迷う気持ちを払拭させるほど説得力があったとは思えないが、当時の私には精一杯の言葉であった。今であれば、こう語るだろう。

「乾布摩擦は確かに1日に1回しか行わない。しかし、生活の中で出される子供からのサインは1日1回とは限らない。『次の学習は、乾布摩擦』という教師へのお知らせの他、朝の会のころサインが出されれば、『乾布摩擦すんだよ』とか、昼頃であれば、『今日、ぽとーんってタオル落としたね』等々、ともちゃんが見たトピックス的な話題を私にしてきたと受け取って相づちを打ちながら言葉を返すことができる。ともちゃんであれば、その都度話題を拾って気持ちを触れ合わせることはできる。

身振りが、場面に応じてできたかどうかだけが目的ではない。子供は身振りサインを介して人との係わりを楽しみながら内面を育てていくので、その姿を追っていくことが実践をする魅力あるところ。たとえ乾布摩擦のサイン一つでも子供は生活を豊かに展開していく。だから1日1回の日課では効率が悪い、ということにはならないだろう」と。

第4節 指定校3年目 発表の年（昭和60年度）

研究内容にまとまりが

試行錯誤を重ねた期間であったが、報告書を作る段階に入ると、これまでのことが整理され、伝えたいことが形

となって見えてきた。

1 コミュニケーショングループ（8名の教員が11事例をまとめる。）

子供の実態をみると、一語文程度の音声言語で気持ちを表わす者は2名いるが、多くが視線や身体活動で自分の気持ちを現していると把握できた。指導にあたり教員たちは、対象の子に適した内容の信号探しや子供が行動するときの手がかりは何かと考えた。

例えば、けんちゃん（仮称）の場合、音声言語ではなく目に映った実物を手がかりとして行動しているととらえられた。実物（小麦粉の袋）とそれが意味する行動（小麦粉遊び）を結びつけて本人が理解できれば、小麦粉の袋が共通の信号となる。実物に向けちょうだいの身ぶりをすることで、大好きな小麦粉遊びができるので泣く必要がなくなり、行動は調整されていった。気に入らないと寝ころんでしまうさっちゃん（仮称）も自分の不明瞭な音声言語を補う絵カード、身ぶり、単語カードなどを、伝えたい内容や時、場所に応じて使い分けていくようになり、行動が改善されたことは意義深い。

この指導は重度障害児の交信を成立させる上で大変有効な方法であると確信できた。

2 感覚・運動グループ（2名の教員が2例をまとめる。）

感覚の成立や脳の働きは見えないので、結果として表出される動作を改善することで、感覚・運動能力を向上させることができるととらえることにした。対象は中学部のあるグループの生徒10名に粗大運動を、1名に上肢の運動を中心にした動作の指導を行う。

粗大運動に関しては、動作に幅がみられない生徒が多いととらえられたので、指導プログラムを立てて指導を始めた。例えば平均台あたりでは、目線が定まらず補助なしでは落ちてしまう子ども送り足が定着してきて、平衡性を保ちながら目線は足より先を見て渡りきる、というように習得段階に伸びを示した。これらの指導を通して、動作を繰り返す中で子供は身体の動かし方のイメージを作り上げていくので、体勢の整え方一つにしても子供が能動的にすることが大事なことを学んだ。

3 子供が生き生きとした授業にするために

子供に伝えるときには、言葉はポイントを押さえて分かりやすく簡潔に話し、学習の始まりと終わりをはっきりさせてまとまりをつける。その時、実物やカード、また定めた音楽を使うなど、学習内容を示す象徴的なものを用意すると子供は見通しを持ちやすくなる。また、子供が動作を学び取っていくには、自発的にものに働きかけることで体得していくところが大きいので、声援や賞賛は十分に能動的にかかわる授業を求めたい。

今こうして書き出してみると、至極当然のことと思えるが、当時は、障害の重い子供の指導内容や方法については確立されていなかったもので、これら体得したものは、子供のとらえ方や指導を考える上で多くの手がかりとなり、授業に自信を持って臨めた。

清水養護の底力

3年目になると、研究会参観者の立場に立ち、「来てよかった」と感じてもらうにはどうしたらよいかを考えるようになっていた。事例研究の中から一つか二つでいい、子供の活動の中から読み取れた価値あるものを実感を持って伝えたい。それからもう一つ。参観者にとにかく分かりやすく伝える工夫をしたいと考えていた。

夏休み、研究報告書等の原稿書きと発表会当日のシナリオ作りが始まり、それに添って映し出したい子どもの画像の取り出しや編集が同時進行で集中して行われた。冊子にまとめる過程では人に分かってもらうための効果ということを考え、図・表を描いては福井大学教育学部助教授三橋美典氏に見てもらった。

皆の気持ちの一つの方向性を持ってまとまっていく心地よさ・充実感を感じられた時期だった。皆必死で、同僚のエネルギーはすごかった。手を抜くということをしてない。少しでもよいものを求めて、ねっちらねっちらとやっていた。皆にそういう一面があることを研究期間も後半になって気づかされた。「これだけみんなでエネルギーをかけ、こんなに長い間考え合ってきたのだから、どういう結果が出ようとこれで大満足よね」と、相談役を引き受

けてくれていたコミュニケーショングループリーダーと語ったものである。1か月前、研究報告書と指導事例集「気持ちの伝え合いを目指して」が刷り上がる。

研究発表会当日

昭和60年10月29日、研究発表会の日は来た。当日県内外から約200余名の参加者があった。高務祐成校長と福井県教育委員会教育長津田四郎氏が挨拶を、教授藤沢清氏は助言を、文部省初等中等教育局特殊教育課教科調査官の大南英明氏からは講評があった。私は、これまでの皆の思いも心に抱き、ここで失敗は許されないと気持ちを入れて登壇し、児童生徒の現状や3年間の研究の概要を話した。二人のグループリーダーは、それぞれに実践してきた経過の中から子供の姿を通して学べた事柄を力強く発表してくれた。

コミュニケーショングループは、事例数も多く研究自体を牽引してくれたとありがたく感じ、感覚・運動グループは、異動等でメンバーが5人から3人になっていたが、それでもそれぞれに学びたいと思うテーマであったからこそこまできたのだと、苦戦してきた彼の発表を聴きながら感じ取っていた。視聴覚もとてもよいできばえで、画面一杯に映し出される子供の表情に涙していた参観者がいたことを後で知らされた。

この年、研究主任の私は38歳、コミュニケーショングループリーダー29歳、感覚・運動グループリーダー25歳、教諭の平均年齢は30.6歳という若さであった。

第5節 実験学校を支えてくれた同僚

信頼でつながり合う

実験学校としての清水養護を語る時、外しては語れないことがある。それは、信頼できる同僚を得ていたことである。

一人目は、コミュニケーショングループのリーダーである。年齢は9歳も若いですが、謙虚で温かみがあり度量が広い人物なので、若手教員からの信望は厚く何かと悩みを聞いてはアドバイスしていた。3年目のある朝、私は教室にその人を訪ねると、「授業が始まっているので、後にしましょ。私は、夜何時になっても構いませんから」とたしなめられた。3年目に転勤してきた年配の教員たちに配慮したのだ。ちょっとの間だからと考えた私の浅はかさを恥じるとともに、そういう配慮が心地よい人間関係を保つために大事なことだと肝に銘じた。グループリーダーとしての大変な仕事を進めながらも、彼は、私が仕事をしやすいようにと常に献身的に助けてくれた。この人がいなかったら、実験学校としての様相は大きく変わっていただろう。

二人目は、視聴覚担当主任。昭和56年度に新採用として赴任してきた若者で、アイディアマン。柔軟な思考の持ち主でとても器用な人。疑問を感じると揺さぶりをかけてくる。発表会当日の視聴覚機器を使つての映像や説明資料は、いいものを作ると言っただけあって、とても分かりやすく構成され効果的なものであった。

新採用教員として赴任してきた個性的な7人。いきなり研究発表校として実践をすることになり、経験も浅いだけに戸惑うことは多々あったろう。でも日に日に力をつけ、本当によく頑張ってくれた。この人たちがいなければ、実験学校として成り立たなかった。年齢の差も忘れて議論したり、率直な疑問をたくさん投げかけてくるので、皆が熟慮するよい機会となり、よりよいものを作り上げたいという点で、皆つながりあっていた。

その新採用教員の中で特に三人目として挙げたい人がいる。感覚・運動グループのリーダーである。彼は清水養護十年史の中で次のように記している。「毎日毎日気負いばかりが先に立ち、メンバーの少なさをいかにカバーしてまとめた研究をするかということばかり考えていた。(中略)なかなか発表の形にまとまらず、焦りと疲労が一度に襲ってきて、まさにパニック状態そのもの。こんな私を救ってくれたのは、諸先輩方の温かな励ましの言葉だった。特に『大切なのはいかに研究をまとめるかではなく、いかに研究したことを素直に分かりやすく発表するかだ』と言われたときは、目の前の霧がサッと晴れたようでスッキリと発表原稿を仕上げることができた」と。彼の強靱な精神力には頭が下がる。

終章

こうして清水養護での教育活動を振り返ると、人生にさまざまなことがあるように、学校もまた創設されたその時から息吹が吹き込まれて歩み出し、時とともに充実していく。創設期の20名足らずの教員が戸惑いながらも教員としての自負をかけ学校作りに情熱を傾けたのは、子供たちの力によるものであろう。純真無垢な子供たちを前に、清水養護の同僚であれば誰もが一度は教員としての有り様を自分に問いかけたに違いない。

7年目、突然舞い込んできた実験学校の取組は、学び合うことで高められる実践の価値を教えてくれ、重度障害児の指導内容や方法を具体的な形あるものにして清水養護に残してくれた。そのことが同僚にまた授業に、その後どれだけ役立てられたか計り知れない。

「一つ釜の飯を食った仲間」という言葉があるが、実験学校の指定を一緒にくぐり抜けようと苦楽をともにしたことで、あ・うんの呼吸でつながりあえた同僚。率直に話し合うことで得られる確かさ、新たな気づきへの気持ちの高まりは味わい深く、私にとってその後の同僚との関係性をうまく保つための呼吸の合わせ方を学べた期間でもあった。清水養護に在職したからこそ経験できた同僚とのかけがえのない3年間であった。

平成22年度の福井大学教職大学院生でもあり、当時清水養護で講師をしていた加納佳晃さんは、「学校改革実践研究報告」の中で清水養護を次のように評している。「教師同士が厳しくも楽しく学び合う文化がある。そこにいる教師たちは、協働して実践を行い、省察を繰り返しながら、日々子どもたちと向き合っている。私が実践の筋に置いた、子どもに寄り添う省察的实践とは、そこではぐくまれたものである」と。

清水養護の明るく開放的で自由な雰囲気、一人一人の子供を丁寧に見取る教員の姿勢は、創設期に醸成され、確かな気風となって現在に至っていることが分かる。誠に小さな学校ではあるが、創設期の年報発刊に始まり、画期的なことを成し遂げている学校だと思う。子供中心の考え方が新しい扉を開いていくのだろう。清水養護の教員たちは、そういう気風が込められたバトンをしっかりと受け止めてこれからも走り続けるに違いない。

今回、私は、その時々清水養護を形作っていた「人」を意識していた。そして、作り出される清水養護というコミュニティが、何を大事とし日々歩みを進めていたのか、そこを描きたいと思ったのである。

【参考・引用文献】 ～ 清水養護学校、福井大学教職大学院 出版物 ～

- 年報 第1号～第10号（1977～1984、1986、1987）
- 昭和58・59・60年度文部省指定実験学校 研究報告・指導事例集 （1985）
- 清水養護十年史（1986）
- 子どもに寄り添う省察的实践の歩み（学校改革実践研究報告） 加納佳晃 （2010）